

2021 年新年互礼会講演録

講師： 山極壽一 氏（前 京都大学総長）

演題： コロナ後の社会を人類の進化から展望する

（新型コロナウイルスとは）

地球は、微生物やウイルスの惑星である。それが人間の活動や気候変動で生態系がおかしくなり、これまで知られていなかったウイルスが野生動物や家畜を介して人間に感染している。新型コロナウイルスは、人々が密集して大集団を作るといふことや、人やモノがグローバルな動きをするといふ現代社会の特徴に乗じてパンデミックを起こした。特効薬やワクチンがきちんと普及していない状態では、3密（密集・密閉・密接）を避けることが、唯一、蔓延を防ぐ手段である。

（社会脳として大きくなった脳）

そもそも人類は集団規模を大きくするように進化してきた。霊長類学者のロビン・ダンバーは、その研究により、平均的な群れの規模を大きくしたことが、脳を大きくする原因となり、脳は社会脳として大きくなったと結論づけた。また、ダンバーが、化石人類の脳容量に集団の規模をあてはめたところ、500cc では10～20人、600～900cc では30～50人、現代人に匹敵する1500cc では150人程度であった。この集団規模は現代社会のコミュニケーションの方法とともに残っている。例えば、10～15人はスポーツの集団で、身体で共鳴してチームワークをつくることのできる共鳴集団。30～50人は学校のクラスで、毎日顔を合わせているから分裂せずに動ける。150人は喜怒哀楽をともにした仲間であり、トラブルに陥ったときに相談できる相手の数ではないか。それ以上の集団とはシンボルを使ってコミュニケーションをとるようになった。

（言葉以前のコミュニケーション）

白目は類人猿にはなく人間だけにある。白目で目の細かな動きを捉え、相手の気持ちを読む。そして共感力を高めている。なぜ共感力を高める必要があったのか。我々の進化史上、共食と共同保育という2つが浮かびあがる。

他の霊長類と異なり人間は、仲間と一緒に食べる。食物がなかなか得られない草原へと出たために、仲間が持ち帰った食糧を、仲間を信用して食べ、食糧をどこでどうやって集めたかを知る必要が生じ、共感能力が高まった。これは人間の独特の社会性の始まりで、これは脳容量の増加にも大きく貢献しただろう。

また、熱帯雨林を出たことで、とりわけ幼児の死亡率が高まり、子どもを多く産むために早く離乳させ、次の

子どもを産む準備をするようになった。また、二足歩行により産道を大きくできなくなり、脳が小さいまま生まれ、生後に脳を急速に増大させるようになった。このため、身体の成長にまわすべきエネルギーを脳にまわす。脳が15歳から16歳で完成すると、エネルギーを身体の成長に送るようになり、急激に身体の成長速度がアップする。これを思春期スパートと呼ぶ。人間は離乳の時期と思春期スパートという2つ時期に死亡率が高まる。両親だけではしっかりと子どもの成長を支えることができず、共同保育が必要になり、家族が成立し、複数の家族の集まり、つまり共同体ができた。

家族と共同体は組織の原理が違う。家族は見返りを求めない組織だが、共同体は見返りを求める互酬性に基づく組織であるため、コンフリクトを起こすが、これを共感がまとめる。そして人間はこの共同体に終生に渡って帰属意識を持つ。

重たくてひ弱な赤ちゃんを人間は腕から離して育児するようになったことで、離れて声で共感を得る仕組みを作った。これが音楽。それが共同の歌になり、高揚感や増大感、感情というものを共有できるようになり、社会の一体化ができるようになった。

(情報革命と均質化)

その上で言葉はできた。言葉は情報化が得意であり、社会の生産能力を高め、情報が氾濫するようになった。脳は、意識と知能とが分かちがたく結びついてできていて、判断が下される。ところが、情報革命により知能の部分だけを取り出して人工知能化した結果、意識や情緒的な部分を忘れがちになり、現実よりもフィクションに生きるようになった。しかし、人間が生物として生きる力を得るためには情緒の部分の置き去りにせず、命と命がどうつながっているのかを考えるべきである。

現代は不安の時代。安全は科学技術で確保できるかもしれないが、安心は一人では得られず、信頼関係によってつくられる。それが、ネット環境が浸透する過程で薄くなった。また、均質化に気を付けるべき。産業と環境の超スマート化により世界中が同じような環境になることが危惧される。人工知能は、似た人間と一緒にしてその情報を評価するため、自分が過去にやっていないことでも、それが自分の期待値になっていく。

さらに、遺伝子編集などにより、経済的・社会的格差に加え、生物的格差が起きようとしていることに目を向けなければならない。

(コロナ後の社会に向けたシェアとコモンズ)

SDGsには、人間が生きる上で不可欠な文化が入っていない。文化は数値化できないものであり、音楽的コミュニケーションを通じて体験と共感によって体に埋め込まれるものである。文化は地域に根差しながら共有できるものであり、ボトムアップでグローバルな目標に乗せていくものを作らなくてはならない。

コロナの中で、文化や社会は、移動する自由、集まる自由、対話する自由という3つの自由によりつくられてきたことを実感した。非常事態宣言の中で、移動する自由と集まる自由が制限された。オンラインなら対話の自由はあるが、対話の根本は会って対面して話すことにあり、それが奪われたことは大変重大なこと。

ただその中で、お金を稼ぐことだけが生きる意味ではないことを学んだ。人間の豊かさを改めて考える中で、社会とのつながりが重要であることも気が付いてきたはず。

コロナ後の社会に必要なのは、シェアとコモンズを再考すること。家族をこえて人々がつながらなければ、家族と共同体をうまく活かすことができない。そのためには所有物を持たずに共存を図る狩猟採集民的世界観を再検討する必要がある。我々はもっと頼りあってもいい。他人に迷惑をかけ、他人に頼り合って生きることがお互いの信頼につながり、危機を脱する手段になることを再認識する必要がある。今、交換や贈与の経済が起きている。シェアが増えていけば、お金の頼る世界ではなく、様々なことに頼れる社会になる。